

## 哺乳類



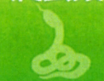
ツキノワグマは生息していないが、奥山のブナやミズナラなどの木の実の稔りが悪い年には里山の市民の森まで下りて来ることがある。野生の哺乳類の多くは夜行性のものが多く、日中、姿を見ることは余り出来ないが、1か所にまとめて排泄する習性のあるタヌキの溜め糞は良く見かける。冬期、陣峰ラインで雪上のテン・キツネやトウホクノウサギの足跡を探しながらのトレッキングが楽しい。

## クマ棚



平成18年秋は、奥山のブナやミズナラなどの木の実の稔りが極端に不作であったため、ツキノワグマが市民の森にも現れ、林内のクリを食うために木に登り、枝をへし折った跡がたくさん、翌春まで残っていた。クリなどの落葉樹は葉を落とすための離層という細胞が出来るが、それが形成される前に枝を折られたので、枯れた葉が翌春まで残ったため、クマ棚のように見える。仮にクマ棚と言っておくが、本来のクマ棚は、頑丈な枝を折り重ねて寝床にしている所を言う。平成18年秋、このクマ棚状の物は市民の森とその周辺だけで80か所以上も発見されている。少なくとも3頭は来ていたのではとされている。

## 爬虫類



数は少ないが、アオダイショウ・シマヘビ・ヤマカガシ・マムシなどのヘビ類がすむ。後の2種は毒を持つので注意したい。尻尾が美しい青色のニホントカゲは、何が原因か解らないが極めて少なくなった。茶褐色のカナヘビは普通に見られる。

## 両生類



トノサマガエル・ヤマアカガエル・ツチガエルはひょうたん池や芝生広場脇の池などで見ることが出来る。通常緑色で、環境に合わせ体色変化するニホンアマガエルがすむ。美しい緑色のシュレーゲルアオガエルもすむ。サンショウウオ類では県内にすむ3種の内、トウホクサンショウウオが生息している。

## 貝類



陸産貝としてはカタツムリの1種ヒダリマキマイマイが普通。以前、小さく右巻きの固い殻を持つヤマキサゴ（絶滅の恐れのある地域個体群LP）が陣峰近くで採られたことがある。10cm位にもなる巨大なヤマナメクジは貝殻は無いが、カタツムリの近似種になる。駐車場近くの小川にはゲンジボタルの幼虫の餌となるカワナが放流されている。なお、李蔵山など、水辺から遠く離れた所でホタルが見つかることがあるが、これは、幼虫が陸産貝類を食うヒメボタルである。



陣峰市民の森は、生活環境保全整備事業により、美しい郷土の自然を守り、すぐれた森林をつくとともに、市民のみなさんが自然の中で、緑を通じて心のふれあいをひろめる場として造成されたものです。山頂の陣ヶ峰（標高323.9m）からは、鳥海山はもとより、市内を展望することができます。



(写真・文 大類貞夫)

お問い合わせ先

## 新庄市役所農林課

〒996-8501 山形県新庄市沖の町10-37

☎0233-22-2111

<http://www.city.shinjo.yamagata.jp/>

e-mail [nourin@city.shinjo.yamagata.jp](mailto:nourin@city.shinjo.yamagata.jp)



山形県新庄市



# 陣峰市民の森の動物



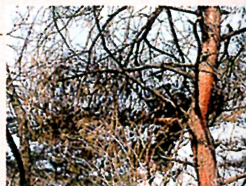
## トウホクノウサギの糞

径1.5cm位の丸い糞。消化しきれていない目の粗い植物の繊維が残る。冬眠しないので雪の上のササの葉やコシアブラの樹皮、時にとげのあるタラノキの樹皮を血を流して食ったりしている。

表紙写真の足跡、跳んだ方向は、写真の下から上、後脚の指を大きく広げ、かんじき状に大きくし、柔らかい雪の上を、2mも跳ぶことが出来る。

## クマ棚 最上峡右岸 (参考)

地上7m位のアカマツの樹上に、人の脚位の太さの枝を折り重ねて造られていた。



## ツキノワグマの糞

平成18年10月9日、芝生広場近くの登山道脇で撮影したもので、色の状態から時間があまりたっていないものと思われる。未消化のクリが白いまま残されていた。

## アオダイショウ

大きいものでは2m以上にもなる。萩野の石動(いするぎ)神社で2.98mの脱皮殻を採ったことがある。本州最大のヘビ。ノネズミやカエルなどを食っている。

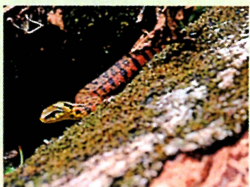


## シマヘビ

アオダイショウより小さく、1.5mを超すことはない。縦に黒いしまがあるののでこの名がある。尾を激しく震わせて地面をたたき脅すことがある。

## ニホンマムシ

最大で75cm位、大きさに比し太いのが特徴。古来有名な毒ヘビだが、毒の量が少なく噛まれても死ぬ事はないと言われるが、人が近付いても動かない事があるので要注意。



## ヤマカガシ

近年、毒ヘビである事がわかった種で、マムシと違い、奥に毒牙がある。最大で2m位。怒らせると、コブラのように頸部(けいぶ)を広げて威嚇(いかく)の姿勢をとる。

## シュレーゲルアオガエル

体長3.5~5cm、オスは最大で4.5cmほど。体色は模様の無い鮮やかな緑色。田起こしの頃からケルルッケルッまたはキリリッキリリッとも聞こえる美声で鳴くが、地中の巢の中で鳴くため姿を見つけにくい。市民の森では、秋の野草園で虫をねらっているサラシナショウマの葉上で見ることが出来る。以前はモリアオガエルと混同されていたほど似ているが、モリアオは大きく、メスは8cmにもなり、白目の部分が赤いので区別できる。

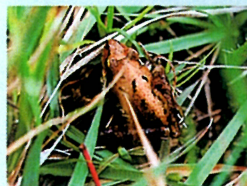


## ニホンアマガエル

体長2~4.5cm、通常は緑色だが、環境の色彩に応じて灰色から褐色と変化する。興奮や休息などカエルの状態によっても変化すると言われている。最も広く見られるカエルで、数も多く、可愛い印象が持たれているが、皮ふから出る、粘液に刺激性の物質が含まれているので注意したい。鼻先から鼓膜の後ろまで黒っぽい帯状の模様が入る。田んぼに水が入る頃、グエッグエッグエッと連続して鳴く合唱が聞かれる。

## コバルト色のニホンアマガエル (参考)

稀にコバルト色のアマガエルが見られる事がある。先天的に黄色色素が欠乏するとこのようなきれいな体色になる。

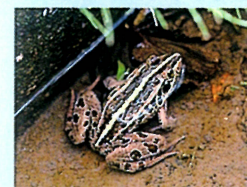


## ヤマアカガエル

大きさは3.5~7.8cm位でメスが大きい。背中は黄土色から赤褐色とさまざま、平野部から山間の水田地帯などにすむ。ひょうたん池や近くの池に近づくとドボンと水中に飛び込むのは本種であることが多い。ニャッニャニャニャと低い声で連続して鳴く。良く似ていて水田地帯に多かったニホンアカガエルは農薬の影響からか、県では絶滅危惧種IB類(EN)に指定されるほど、数が少なくなって来た。

## ツチガエル

県ランク準絶滅危惧種(NT)。大きさは3~6cm位、黒っぽい灰褐色で、イボがあるためイボガエルと呼ばれている所が多い。オタマジャクシでも越冬するのはウシガエル(食用ガエル)と同じ。ギューギューと低い声で連続的に鳴く。



## トノサマガエル

大きさは5~9.5cm位と大きい。背中の真ん中に緑がかった筋のあるカエルで、風格があるのでこの名がある。跳びはねる力が強い。グルグルグルッと連続的に鳴く。隣県の仙台平野には本種はおらず良く似たトウキョウダルマガエルがすむ。

## トウホクサンショウウオ

県ランク準絶滅危惧種(NT)。大きさは9~14cm、黒っぽい暗褐色で青白い小斑点が散りばめられている。湿潤な落葉の下にすむため、目に触れる事はほとんど無いが、早春の産卵期に、湧き水の水溜まりで見える事が出来る。県内には他に山間の渓流中にハコネサンショウウオと低山から深山の水辺近くにクロサンショウウオがすむ。



## トウホクサンショウウオの卵のう

芝生広場脇側溝の水溜まりで毎年、卵のうを見る事が出来る。

## クロサンショウウオの卵のう (参考)

山間部の池沼で、春、水まゆと俗称されている卵のうが見られる。一つの卵のうには数10から100個以上の卵が入っている。



## メダカとヌカエビ

ひょうたん池にすむ。メダカは国ランク絶滅危惧II類(VU) 県ランク情報不足(DD)に指定されている。メダカは池・沼やゆるい流れにすみ、大きい流れの瀬脇に群れるウグイ(ハヤ)の稚魚がよくメダカと誤認される。ヌカエビは微小な藻類を餌にしているようで、釣餌で釣ることは出来ない。



## ヤマナメクジ

10cm以上にもなる大きなナメクジ。雨上がりの地面や樹幹でよく見かける。貝殻は無いがハマグリやタコと同じ軟体動物。



## ヒダリマキマイマイ

左巻きのカタツムリの普通種。上から見て、中心からの巻きの方向で分かる。また、手の上に乗せた時の殻の口がどちら側にあるかで分かる。写真の個体は幼体。成体は殻のふちが外側へめくり上がる。

